東アジア文化交渉研究　第２号（2009年）抜刷

日本発近代知への接近

― 梁啓超の場合

Approaching Modern Knowledge via Japan: Liang Qichao's Efforts

沈　国　威

SHEN Guowei

日本発近代知への接近

― 梁啓超の場合

沈　国　威

Approaching Modern Knowledge via Japan: Liang Qichao's Efforts

SHEN Guowei

Chinese and Japanese started to reverse their respective status beginning in the mid-19th-century when Japanese became the premier medium to disseminate Western learning in East Asia. Growing numbers of Chinese began to learn Japanese as a means to acquire modern knowledge. Liang Qichao discovered Japan as a source of "information" only by the end of 1896. Under the influence of his teacher Kang Youwei, Liang gradually realized Japan's significance as a producer of modern knowledge. He tried to master Japanese himself and, using his popularity, called on his compatriots to learn the language and obtain new knowledge from Japanese books. This paper reconstructs and analyzes Liang's efforts at promoting Japanese between 1896 and 1902.

キーワード：西学、新名词、日语、国语

はじめに　漢文と漢字の二律背反

劉進才は、アンダーソンが提起した近代民族主義の発生と民族国家の言語：国語の形成との関連について、次のように解釈を与えている。

> ヨーロッパ各民族言語の形成において、それぞれの現代民族国家の言語の誕生は古い神聖言語：ラテン語、ギリシア語、ヘブライ語の束縛から脱却し、地域方言へ接近し、また現代的印刷術により各方言地域において書面語を確立させた結果である。

また、

> 清朝末期の中国にとって、民族主義の発生と印刷言語の形成はヨーロッパと同じではない。

とも指摘している[1)]。中国はヨーロッパと同じではない、特に印刷言語の面では同一視できないとの主張は肯けるが、中国、或いはアジアの他の国・地域もそれぞれ個々の言語の問題である以前に、漢字文化圏域内の国・地域が如何に民族国家として国語を獲得するかという東アジア全体が直面する近代的な課題を解決しなければならないという点において、むしろヨーロッパと多くの類似性を有する。われわれは問題意識を伝統的な言語が近代民族国家の言語に進化していくという側面まで拡大させる時、次のような事実に直面するであろう。つまり表意文字の漢字は、片方では「神聖言語」の古典性を有しながら、片方では言語を超越する書写記号体系になりうるという現実である。漢字は、漢字文化圏に言語の記録手段を提供するのだが、同時に漢字によって記録された中国の古典は、文化圏全域に文章の規範を示しているのである。漢字によって書面語の表現が可能となったが、その表現の自由度が漢文によってまた厳しく束縛されている。従って域内の各国の近代国語の成立は、まず脱漢文の過程を経なければならないが、漢字はたやすく切り捨てることができなかった。例えば日本では明治初期から様々な議論があり、また実際の施策も数多く試みられたが、漢字の地位は揺るがなかった[2)]。それどころか、漢字文化圏は正に古い漢字によって西洋の近代知識を受容しえたのである。現在、すでに自らの言語の表記体系から漢字を排除した国家、地域でも大量の漢字音が相変わらず書面語の主要な部分を占めている。

漢字文化圏の書面語として共通語（リングワ・フランカ（Lingua franca））の役割を果たしていた漢文とは異なり、日本語は近代までに東アジアにおいて商業活動、古典の伝承、新しい知識の受容、そのいずれの面においても重要な言語ではなかった[3)]。しかし明治期に入ってから日本語が民族国家の国語へといち早く成長を成し遂げた。日本語は西洋文明と結びつけられ、近代の知識を伝える言語となった[4)]。そのプロセスにおいて漢字語が決定的な役割を果たした。漢字語の存在によって日本語は漢字文化圏の国と地域にとって、迅速に新しい知識を取り入れる可能性を有する言語として、初めて非母語話者が習う対象となり、漢文（古典中国語）とロールチェンジした。かくして東アジアが西洋の知識を受容するに当たり、日本語が他の言語に大きな影響を及ぼすことになる。

しかし、日本語の学習に関しては植民地支配、植民地における言語政策の推進が背景にある台湾や朝鮮半島の事情と異なり、中国は、むしろ自ら進んで日本語を学習し、日本書を翻訳しようとしたのである。お雇い日本人の招聘や日本留学ブームなど、いずれも明治初期の日本と似た主体性が保たれていた。筆者の最近の研究の興味は近代以後——日清戦争から五四運動までの間に中国人はいかに日本語を認識し、それをマスターするようになったのか。言い換えれば、中国人の日本語知識獲得の歴史と日本語翻

1) 劉進才、『語言運動與中国現代文学』、中華書局、2007年13～14頁。安德森著、呉叡人訳、『想象的共同体』、上海人民出版社2005年版38～47頁。

2) 漢字とそれによって記録されている典籍の間に切っても切り離せない関係が存在しない。

3) 梁啓超は『中西学門径書七種・幼学通議』で当時（1898）中国沿海都市での英語学習について次のように指摘している。「西文西語之当習。今之談洋務者莫不言之矣。雖然有欲学焉、而為通事為買辨以謀衣食者；有欲学焉、而通古今中外、窮理極物、強国保教者。受学之始、不可不自審也。今沿江沿海各省、其標名中西学館、英文書塾以教授者、多至不可勝数。」英語学習施設の増加や目的の多様化が窺える。

4) 日本語の変化は、江戸時代の蘭学の蓄積の結果でもある。蘭学の勃興により日本は外部世界の情報、知識を取り入れる２つのチャンネルを確保したのである。

訳集団の形成史である。それまで全く存在感のなかった日本語が短期間に学習の対象になり得た理由、中国の民衆が日本経由で西洋の知識を取り入れることに躍起になった経緯、動機付けなどについて、別稿で考察したことがある[5)]。本稿では、梁啓超の日本知識に対する意識の変化とその日本語学習に焦点を絞って考察することにしたい。

一、「情報」から「知識」へ

まず「情報」と「知識」を定義しておこう。本稿では「情報」は、国家間の政治、軍事の交渉に優位に立つべく収集されるデータの集合を指し、「知識」は人類の知的営みが体系化されたものを指す[6)]。明代以来、倭寇対策の一環として、日本に関する情報収集が行われるようになった。『籌海図編』（明・鄭若曾）、『日本風土記』（明・侯継高）、『吾妻鑑補』（清・翁海村）などがその成果である。明治維新以降、琉球合併などにより中国国内では日本に対する警戒心が強くなり、軍事情報も含め、情報の収集が公使館の重要な仕事となった[7)]。一方、馮桂芬が「前年、西夷突入日本国都、求通市、許之、未幾、日本亦駕火輪船十数、徧歴西洋、報聘各国、多所要約、諸国知其意、亦許之、日本蕞爾国耳、尚知発憤為雄、独我大国将納汚含垢以終古哉」（『校邠廬抗議・製洋器議』）と警鐘を鳴らしているように日本の動向を根拠に中国の改革を促進しようとする動きも現れたが、「西夷突入日本国都、火輪船十数、徧歴西洋」からも分かるように正確に情報を得る手段はまだ確立されていなかった。それどころか日本から知識を得ようとする発想は、例えば渡辺三男が指摘しているように馮桂芬以降も長らく存在しなかった[8)]。日清戦争の勝利は明治維新の成功を強烈に証明した。富国強兵の道を歩むには日本を手本に西洋の新知識を取り入れなければならず、日本は情報収集の対象だけではなく、知識の提供者になりうるという認識がようやく顕在化した[9)]。康有為、梁啓超や張之洞らはその推進役であった。それでは1896年以降、改革のために奔走する梁啓超にとって、日本はどのような存在であったのだろうか。梁啓超は百日維新が失敗した後日本へ亡命し、十数年滞在した。梁氏はその間に『清議報』、『新民叢報』を出版し、中国社会の改革を推進し、国民の啓蒙に多大な貢献をすると同時に、また学術面では日本の影響を強く受けている。日本知識の受容を語るには、梁啓超は避けて通れない存在である。次節では日本知識に目覚めた梁啓超の軌跡を辿ってみたい。

5）沈国威「中国における近代知の受容と日本」、沈国威編『漢字文化圏諸言語の近代語彙の形成——創出と共有』収、関西大学出版部2008年１～41頁。

6）両者を峻別できない場合もあるが、本稿の知識は特に西洋近代の教育システムに基づく内容を念頭に置いている。

7）黄遵憲の『日本国志』や姚文棟の一連の翻訳はそのような性質を大いに帯びているであろう。但し日本語の運用能力の関係で情報収集の活動は大きく制限された。

8）沈国威『近代日中語彙交流史』笠間書院、2008改訂新版81頁を参照。

9）日本知識は、日本オリジナルのものと日本経由のもの、つまり西洋の知識に分けられる。言うまでもなく、日本を経由する以上、日本的な変容を蒙らなければならない。

二、日本知識に目覚めよ：梁啓超の軌跡

梁啓超は1896年6月（光緒22年丙申五月）、李端棻に代わり「奏請推広学校設立訳局報館摺」という上奏文を執筆し、翻訳局について次のように述べている。

> 三曰開訳書局也：兵法曰“知己知彼、百戦百勝”。今與西人交渉而不能尽知其情偽、此見弱之道也。欲求知彼、首在訳書。近年以来、製造局、同文館等処、訳出刻成已百余種、可謂知所務也。然所択之書、詳于術芸而略于政事、于彼中治国之本末、時局之変遷、言之未尽。至于学校、農政、商務、鉄路、郵政諸事、今日所亟宜講求者、一切章程条理、彼国咸有専書、詳哉言之、今此等書悉無訳本。又泰西格致新学、製造新法、月異歳殊、後来居上、今所已訳出者率十年以前之書、且数亦少、未能尽其所長。今請于京師設大訳書館、広集西書之言政治者、論時局者、言学校、農、商、工鉱者、及新法新学近年所増者、分類訳出、不厭詳博、随時刻布、廉値発售、則可以増益見聞開広才智矣。[10]

この文章で梁啓超は翻訳局の設立の必要性を訴えるのに、「知己知彼、百戦百勝」という常套句から文章を始めた[11]。西洋と交渉するにはその詳細を知り尽くさなければならず、そのためには何よりもまず西洋の書物を翻訳しなければならない。しかし、これまでに江南製造局や同文館は100点以上翻訳し、出版してきたが、製造等の技術系のものが中心で、政治関係の書物が少ない。教育、農業、商業、交通、通信、そして特に緊急性を要する法律、規則類の訳書は殆どない。現状を改善するには大翻訳局を設置し、西洋の書物を集め、専門別に訳出し、安く中国社会に提供しなければならない、これが梁啓超の提案である。そして梁啓超が考えている翻訳書の種類は、政治、時局、教育、農業、商業、鉱業、及び日進月歩の新技術、新学問である。論旨としては、2年前になされた馬建忠の議論の域を出なかったが[12]、梁啓超にとっては「情報」から「知識」への移行を強く求めている点に時代性が感じられる。但し1つ留意しなければならないことは、馬建忠の場合と同じくこの上奏文では全く日本に触れていないことである。

折しも汪康年らが急ピッチで『時務報』の発刊を準備しているところであった。「汪康年は梁啓超と語り合った際、雑誌を創刊して、広く五大州の近況を翻訳し、各省の新政を詳しく載せ、重要な外交交渉を博捜して、読者に地球の大勢を周知させ、我が国の現状を知悉させない限り、民智を開き国恥を雪ぐことはできない」という認識を示し[13]、情報源を日本を含む外国のメディアに定め、日本語翻訳者の斡旋を東京公使館の査雙綏に依頼した。査雙綏は返信の中で「日本新出政治書甚夥、容略暇当詳為探問、並史書各種価目、一斉開単奉覧」と綴っている[14]。つまり日本では新しく出版された政治関係の図書が非常に多く、暇な時に詳しく調べ上げ、歴史図書などの図書目録といっしょに提出すると報告したので

10）張静廬輯注『中国近代出版史料・二編』、上海：上雑出版社1953年3～8頁。

11）「知己知彼」云々は政府役人を動かす戦術とも考えられよう。

12）馬建忠「擬設翻訳書院議」、張静廬輯注『中国近代出版史料・初編』、上海：上雑出版社1953年29～34頁。

13）丁文江編『梁啓超年譜長編』、上海人民出版社1983年52頁。以下『年譜長編』と略す。

14）『汪康年師友書札・二』、上海古籍出版社1986～1989年1277頁。

ある。汪康年から翻訳者の斡旋だけでなく日本の書物について調査するようにとの依頼もあったと推測される。1896年８月29日『時務報』の第３冊が刊行され、日本の新聞雑誌をニュースソースとする「東文報訳」が正式にスタートした[15]。第３冊の巻末に「本館弁事諸君名氏」という知らせが掲載されている（括号の中は割注である）。

> 日本東京古城貞吉（日本近習西法訳西書甚多、以東文訳華文較為簡捷、今除訳報外兼訳各種章程並書籍）

割注から『時務報』は外国の新聞に掲載されているニュース（情報類）だけではなく、近代知識全般に関しても日本を通じて取り入れようとする方針が明らかになった。

1896年12月５日（光緒22年11月朔）、梁啓超は黄遵憲の『日本国志』の公刊に際し、「日本国志序後」を認めた。文章の冒頭に、

> 中国人寡知日本者也、黄子公度撰日本国志、梁啓超読之、欣懌咏嘆。黄子乃今知日本、乃今知日本之所以強、頼黄子也。又憑憤責黄子曰、乃今知中国、知中国之所以弱、在黄子。成書十年、久謙讓不流通、令中国人寡知日本、不鑑不備、不患不悚、以至今日也。（中略）
> 以吾所読日本国志者其于日本之政事人民土地及維新変政之由、若入其閨闥而数米塩、別黒白而誦昭穆也。其言十年以前之言也、其與今日之事、若燭照而数計也。又甯惟今日之事而已。後之視今、猶今之視昔、顧犬補牢、未為遅矣。[16]

とある。基本的に同書を日本の詳細を知る資料集として扱っているのである。梁啓超は『日本国志』に記録されているのが10年も前の日本情報であることを心得ていたつもりだが、それでも「其与今日之事、若燭照而数計也」とし、「顧犬補牢、未為遅矣」とその有用性を強調した。しかし後に中国駐在の日本公使矢野龍渓から「無異據明史以言今日中国之時局也」と揶揄され、ショックを受けた[17]。1898年上海大同訳書局より梁啓超編の『中西学門径書七種』が出版された。その中の一篇である「時務学堂功課詳細章程」では『日本国志』が唯一日本関連の書物としてリストアップされている。日本知識に関する書物は質量とも少なかった時代だけにやむ得ないことであろう。ところで「日本国志序後」が執筆された時『時務報』の「東文報訳」がスタートしてすでに３ヶ月になる。梁啓超も近くにいる翻訳担当の古城貞吉から日本について様々な情報を入手し、日本に対する認識も大いに改められたところであろう。周囲の人も古城に書物の購入等を依頼し、日本に対し大いに関心を示していた。

日本が知識の源でありうるという判断を最も早く下したのが梁啓超の師たる康有為である。日本を手

15）沈国威「『時務報』の東文報訳と古城貞吉」、『アジア文化交流研究』第４号2009年。

16）黄遵憲『日本国志』、上海古籍出版社2001年影印本。この文章は後に『時務報』第21冊（1897年３月23日）に掲載された。

17）梁啓超「新民説・第11節論進歩」1902年６月20日。

本に君主によるトップダウン式の改革を目指す康有為にとって日本書は理念から具体的な方策まで豊富な知識を提供してくれそうな宝庫である[18]。1896年10月広西に行った康有為は、1897年正月初十以降、桂林から数回梁啓超に書簡を送り、広西において学校の設立、書物の翻訳、新聞の出版、道路の建設など4項目の提案をし、実施への協力を求めた。この時点で康有為は、すでに迅速性という観点から翻訳の対象を西洋書から日本書にシフトしたことが分かる。しかし康有為からの手紙を受け取った梁啓超は、三月三日（西暦4月4日）次のように返信している。

> 一在桂擬辨之四事、超惟于学堂一端以為然、其【它】三事皆有異議、請条陳之。
> 日本書同文幾半、似易訳于西文、然自頃中国通倭文者不過数人、皆有館地領厚薪、安能就桂中之聘？然則其勢必覓之于日本。日本維新三十年中、読中国書者幾絶、（華人疑倭人通漢文甚易者、非也。倭人正以漢文之難通故、創伊呂波等以代之。伊呂波行、通漢文者希矣。）其有一二、則皆守旧之徒、視新学如仇敵、必不肯翻我欲翻之書、此是古城所述情形。如此則覓之于日本亦不易也。即能得一二人、而毎人月供薪水数十金、能翻幾何？超以近日『時務報』、『知新報』、『農学報』（上海新開者、超與聞其事）所請日本翻訳艱難情形観之、而知日本書之不易訳矣。（中略）
> 超自頃常勧此数処報館、謂不必騖多備翻訳之名、無寧多聘一二通英文者、多訳英文之為得也。故訳日本書之事、超不以為然也。[19]

日本書翻訳の難しさや翻訳要員確保の困難さなどが強調されている。いずれも『時務報』の経験に基づくものであり、特に古城貞吉から得た情報が根拠となっていた。但し梁啓超が反対していたのは広西の桂林という人材不足のところで翻訳をすることで、日本書を翻訳すること自体に反対しているわけで

18）康有為の日本への関心は80年代にすでにあった。しかし氏を日本脅威論者と見るのは早計であろう。『日本書目志』の準備は康有為の日本モデル観の確立と見るべきである。

19）『年譜長編』77～79頁。「第一は、広西で計画されている四つの事業のうち、超は学堂の件のみ賛成です。その他の三つの事業についてはすべて異義があります。

日本の書物は文字が半ば同じで、西洋語よりも訳しやすそうに見えますが、最近でも日本語に通じる中国人は数人にすぎず、いずれも在外公館で高い給料を取っていますから、どうして広西からの招聘に応じましょうか。とすれば、勢いその人材を日本に求めざるを得ませんが、日本では維新以来三十年、中国の書籍を読む者はほとんどいなくなりました（中国人は日本人が容易に漢文を理解できると思っていますが、それは間違いです。漢文が難しかったので、日本人は伊呂波を作ってこれに代えたのです。伊呂波が用いられるようになってから、漢文に通じた者は稀になりました）。一人二人いるとしても、すべて守旧の徒に過ぎず、新学を仇敵のように見なしており、私たちが訳して欲しい書籍を訳そうとはしないでしょう。これは古城の話です。とすれば、その人材を日本に求めるのも容易ではありません。たとえ一人か二人雇うことができたとしても、それぞれに毎月数十金の俸給を支払って、いったいどれほど翻訳することができましょう。最近、『時務報』『知新報』『農学報』（上海で新たに創刊されたもので、超も関わっています）が日本人の翻訳者を招く件で苦労したことから、超は日本書の翻訳が容易ではないことを悟りました。（中略）超は近ごろつねに、これら幾つかの報館に対して、翻訳担当者の名をぞろぞろ連ねるよりは、英文に通じた物を一人か二人余計に雇って、英文を少しでも多く訳させた方がいい、と勧めています。それゆえ、日本書翻訳の件について、超は賛成しかねます。（島田虔次編訳『梁啓超年譜長編』第1巻、岩波書店2004年143～145頁、以下日本語版と記す）

はなかった。1897年４月『農学報』が創刊された。梁啓超は序文で、『農学報』は「月泐一編、布諸四海、近師日本、以考其通変之所由；遠摭欧、墨、以得其立法之所自」とその主旨を述べている[20]。日本は欧米と共に中国改革の手本となったのである。引き続き梁啓超は1897年５月から３回にわたって、『時務報』に「訳書」という長文を連載した[21]。この文章は「変法通議」の「論学校」の一部である。文章自体は、前述した馬建忠の上奏文で提起された問題を更に詳細に敷衍させたものであったが、最後の段落に次のような文章が記されている。

> 日本與我為同文之国。自昔行用漢文。自和文肇興。而平仮名片仮名等。始與漢文相雑厠。然漢文猶居十六七。日本自維新以後。鋭意西学。所翻彼中之書。要者略備。其本国新著之書。亦多可観。今誠能習日文以訳日書。用力甚鮮。而獲益甚鉅。計日文之易成。約有数端。音少。一也。音皆中之所有。無棘刺扞格之音。二也。文法疏濶。三也。名物象事。多與中土相同。四也。漢文居十六七。五也。故黄君公度謂可不学而能。苟能強記半歳。無不尽通者。以此視西文。抑又事半功倍也。

下線部では日本語に翻訳された西洋の書物だけではなく、日本の新しい書物も見るべきものが多く、いずれも中国語に翻訳すべきであると指摘している。これまで全く日本に触れなかった文章の流れからすればこの段落は些か唐突の感が否めないが、梁啓超の師、康有為のかつての主張に加えて、黄遵憲や古城貞吉らから得た知識に基づくものであることは間違いないであろう。これはまた初めて日本書を翻訳すべしだと公言するものでもある。

1897年10月16日『時務報』第42冊に梁啓超による「大同訳書局叙例」が掲載された。訳書局設立の趣旨について次のように述べられている。

> 聯合同志。創為此局。以東文為主。而輔以西文。以政学為先。而次以芸学。至旧訳希見之本。邦人新箸之書。其有精言。悉在採納。

大同訳書局は康有為の「書物を大いに翻訳すべし」という提案を実施するために設立された機関であるが、何よりも重要なのは、「日本書を主とし、西洋書を輔とする」翻訳方針の確立である。更に「日本人による新著も、内容がよければ翻訳の対象に加える」という認識も示されている。日本知識は、日本経由のものだけではなく、日本発のものも視野に入ってきたのである。

1897年11月15日（光緒23年10月21日）、梁啓超は『時務報』第45冊に「読日本書目志後」という一文を寄稿した。「梁啓超曰。今日中国欲為自強第一策。当以訳書為第一義矣。吾師南海先生。早睊睊憂之。大收日本之書。作書目志以待天下之訳者」という書き出しに続き、康有為の『日本書目志』の序文が全文抄録されている。そして次のように結んでいる。

20）『時務報』第23冊（1897年４月12日）。

21）『時務報』第27冊（５月27日）、29冊（６月10日）、33冊（７月20日）。

啓超既卒業。乃正告天下曰。訳書之亟亟。南海先生言之既詳矣。啓超願我農夫。考其農学書。精択試用。而肥我樹芸。願我工人読製造美術書。而精其器用。願我商賈読商業学。而作新其貨宝貿遷。願我人士読生理心理倫理物哲学社会神教諸書。博観而約取。深思而研精。以保我孔子之教。願我公卿読政治憲法行政学之書。習三条氏之政議。撢究以返観。発憤以改政。以保我四万万神明之冑。願我君后読明治維新之書。借観於寇讐。而悚厲其新政。以保我二万万里之疆土。納任昧於太廟。以広魯於天下。庶几南海先生之志。則啓超願鼓歌而道之。跪坐而進之。馨香而祝之。

農業、製造業、商業、政治、憲法、行政を含む人文科学全般を日本書から翻訳しようと梁啓超は考えている。特に明治維新に関する書物を訳出し、「君后」に読んでもらうと意気込んでいた。このように日本書、及び日本知識に関する康有為の重要な主張は、『日本書目志』の刊行を待たずにお披露目され、日本が知識の源であるという認識がこれまでになく浸透した。以下、1898年秋までの梁啓超が関係する出来事を簡単に整理してみよう。

- 大同訳書局が1897年11月に設立した後、「先生托其友韓台往日本調査採訪応訳之書、並請深通漢文之日人襄助訳事。雲台亦『時務報』社員也」と実際に行動を起こした。康有為は必ずしも『日本書目志』の図書を入手していないからであろう。
- 光緒二十四年春二月（1898）、大同訳書局から『大東合邦新義』が出版された。梁啓超が序文を書いた。但し原書は漢文で書かれて、翻訳するより「因其義、正其文、據縞素而増彩絵」という翻案ものである。
- 同三月、梁啓超は大同訳書局から『中西学門径書七種』を出版するが、出版済みの翻訳書を対象にしているので、日本関連の書物は、『日本国志』だけであった。
- 1898年8月23日の『京報』に梁啓超による「擬訳書局章程并瀝陳開辦情形摺」が掲載され、「今擬于七月即行開局編訳、已向日本東京購得美国学堂初級功課書十数種、次第開訳」とあり、上海で編訳学堂設立の準備が進められていることがわかる。
- 『京報』9月6日に同じく梁啓超による「擬在上海設立編訳学堂并請准予学生出身摺」が掲載された。「訳書一事、為育才之関鍵、（略）査中国向来風気未開、中西兼通之人実不多観、故前者間有訳出之書、大都一人口授一人筆述、展轉刪潤、訛誤滋多。故挙人此次辦理訳務、擬先聘日人、先訳東文。因日本人兼通漢文、西文之人尚多、收效較速。而中土訳才甚少、計不得不出此也。」とあり、日本書の翻訳を迅速に行う方法として日本人を招聘するよう提案した。

すべてが順調に運ばれようとしていたのである。しかし1898年9月21日、政変が起き、百日維新があえなく失敗し、梁啓超も日本への亡命を余儀なくされた。日本ルートは頓挫したかに見える。

三、梁啓超の日本語学習

間一髪難を逃れた梁啓超は、日本の軍艦に乗り込み、長き亡命生活に入る。「戊戌八月、先生脱険赴

日本、在彼国軍艦中、一身以外無文物、艦長以『佳人之奇遇』一書俾先生遣悶。先生随閲随訳、其後登諸『清議報』、翻訳之始、即在艦中也」とあるように実際に日本語に接しはじめたのである[22)]。また「初到東京時、似系住牛込区馬場下町、当時大隈左右如犬養毅、高田早苗、栢原文太郎時有来往、並力為講解日本文法」とあるように日本の友人から日本語の手ほどきを受ける[23)]。梁啓超は1899年３月13日（旧暦二月二日）付の夫人への手紙の中で「我等読日本書所得之益極多極多。他日中国万不能不変法、今日正当多読些書、以待用也」と日本語学習の喜びと必要性を語っている[24)]。日本に来て５ヶ月経った頃のことであった。

その10日後、梁啓超は集中的に日本語を習い始めた。目的は言うまでもなくもっと日本書を読むためだったであろう。先生はかつての万木草堂の同窓で、１年ほど前に日本に来ていた羅普である。このことについて後に羅普は次のように振り返っている。

> 己亥春、康南海先生赴加拿大後、任公約羅孝高普同往箱根読書、（中略）時任公欲読日本書、而患不諳假名、以孝高本深通中国文法者、而今又能日文、当可融会両者求得捷径、因相研索、訂有若干通例、使初習日文径以中国文法顛倒読之、十可通其八九、因著有《和文漢読法》行世。雖未美備、然学者得此、亦可粗読日本書、其収穫頗大。[25)]

これまでの研究では梁啓超の速成（捷径）の要望に応えるべく羅普は梁啓超と「切磋琢磨」し、「一夜」にして纏めた「顛倒読之」の規則が『和文漢読法』としてしばらく留学生の間で筆写された後、公刊されたという経緯が明らかになっている[26)]。筆者はかつて日本語学習の見地から本書を分析したことがあ

22）『年譜長編』153頁。「戊戌八月、先生は危地を脱して日本に向かった。日本の軍艦の中では、身一つだけで何も携えていなかったので、艦長は気晴らしに『佳人之奇遇』という書物を先生に与えた。先生は読んだ端から翻訳していき、その後、これを『清議報』に掲載した。先生の翻訳は、じつにこの軍艦の中で始まったのである。」日本語版269頁。

23）『年譜長編』169頁。「東京に着いた当初、牛込区馬場下町に住んでいたようです。当時、大隈［重信］の側近であった犬養毅、高田早苗、柏原文太郎は、しばしば往来していただけではなく、彼に日本語の文法を精力的に教えました。」日本語版288～289頁。

24）『年譜長編』176～177頁。「私たちは日本書を読んでとてもとても大きな利益を得ました。中国は将来必ず法を変じないわけにはいきませんから、今は書籍をたくさん読んで、いざという時、役に立つようにしておかねばなりません。」日本語版296頁。

25）『年譜長編』175頁。「己亥の春（二月十一日、陽暦三月二十二日）、康南海先生がカナダに赴かれた後、梁啓超は羅孝高、名は普、と箱根へ行って読書にいそしんだ。（中略）当時、任公は日本書を読もうとしたのだが、仮名文字を諳していないことに苦しみ、孝高がもともと深く中国語の語法に通じている上に、今では日本語もできることから、両者を一体化すれば速成法を得られると考え、そこで互いに検討を重ねて、若干の通例［全四二節］を定め、初めて日本語を習う者に、いきなり中国語の語法に従って返り読みさせてみたところ、十中八九、それで通じたので、『和文漢読法』を著して出版した。完璧とは言えないものの、学習者がこの方法を習得すれば、ほぼ日本語を読めることになり、その効果はなかなか大きかった。」日本語版293～294頁。

26）周作人「和文漢読法」、鍾叔河編『周作人文類編日本管窺』、湖南文芸出版社1998年158-161頁。夏暁虹「梁啓超與日本明治文化」、中国世界委員会編『中国與世界』第五輯、三聯書店1988年182～206頁；「和文漢読法」原戴『清末小

る[27]。『和文漢読法』は二つの部分に分けることができ、第一部は第1節から第37節までで、日本語を読解する時の規則を説明している部分であり、第二部は第38節から第42節で、小辞典のようなものである。中国語の漢字知識で理解できない日本語の中の独特な漢字語に対して意味解釈が加えられている。このような内容は当時は「和文奇字解」、或いは「奇字解」と呼ばれていた[28]。

『和文漢読法』は当時の日本語に対する中国人の幻想と錯覚を端的に表している。康有為の「文字與我同、但文法稍有顛倒」[29]や梁啓超の「日本文漢字居十之七八、其專用假名不用漢字者、惟脈絡詞及語助詞等耳。其文法常以實字在句首、虛字在句末、通其例而顛倒讀之、將其脈絡詞語助詞之通行者、標而出之、習視之而熟記之。則可讀書而無窒閡矣」[30]などが代表的な発言である。つまり「同文」の日本語に対して、「倒置して読む」方法を身に付け、更に中国の漢字知識で理解できない文字列を理解さえすれば日本書を読むことが出来ると考えられていたのである[31]。

一週間足らずの箱根滞在で日本語に対する自信を付けた梁啓超は1899年4月1日、『清議報』第10冊にかの名文「論学日本文之益（日本文を学ぶ益を論ず）」を発表した。誰かが日本書を翻訳してくれるのを待つより一人一人が日本語を習い、直接原書を読み、新知識の吸収に努めようと呼び掛けた。文章の中で自らの学習実践法として紹介した『和文漢読法』も熱烈に世に迎えられた。日本より新知識を取り入れようとする動きは、戊戌政変もその流れを止めることができなかった。それどころか1898年秋、張之洞の『勧学篇』が爆発的に流行り、日本留学が政府と民間の双方に奨励され、空前のブームとなった。また中国の求知心に応えるべく、例えば日本で善隣訳書館が設立され、『大日本維新史』、『日本警察新法』、『国家学』、『戦法学』（いずれも1899年）といった漢文で書かれた書物が出版された[32]。20世紀に入ってから中国の政治、社会に対する西洋宣教師の影響が急速に衰え、日本から外部世界の情報及び近代的知識が自由に入ってきたのである[33]。

説から』第53号1999年4月『晩清的魅力』収、百花文芸出版社2001年76～92頁。石雲艷『梁啓超與日本』、天津人民出版社2005年45～81頁。陳力衛「梁啓超の『和文漢讀法』とその「和漢異議字」について――『言海』との接点を中心に」、沈国威編『漢字文化圏諸言語の近代語彙の形成――創出と共有』収、関西大学出版部2008年423～462頁。

27) 沈国威「黄遵憲的日語、梁啓超的日語」、『或問』第11号2006年137～148頁。羅晋の日本語学習は明らかに日本の教育機関が提供した環境の中で完成しており、来日した一年余りの時間の中で、ヨーロッパの文法体系に基づいて、新たに作られた日本語の文法体系を深く理解しており、またその知識を何とかして梁啓超に教えようと試みた。いうまでもなく『和文漢読法』は今日の文法知識で判断すれば、乱雑で体系性がないが、しかし、その独特の目的：極めて短い時間である種の日本語文献を閲読する能力を身に付けるよう初心者を助けることを考えれば、非常によくできていることも否定できない。

28) 沈国威「関於和文奇字解類資料」、『或問』2008第14号117～128頁参照。初期の日本語学習辞書については沈国威「日漢辞書的黎明期」、『或問』第15号2008年75～84頁を参照。

29) 康有為「代楊深秀摺」『戊戌變法檔案史料』、中華書局1958年446頁。

30) 梁啓超「論学習日本文之益」、『清議報』第10冊1899年4月1日。

31) 沈国威「日本語は難しいか――清末民初の学習者の場合」、関西大学CSAC2008年研究フォーラム「近代東アジアにおける日本語」配付資料。

32) 狭間直樹「中国近代における帝国主義と国民国家」、狭間直樹編『西洋近代文明と中華世界』、京都大学学術出版会2001年17～22頁。

33) フェアバンク（John K. Fairbank）編『剣橋中国晩清史』、中国社会科学出版社1985年上巻634頁。

梁啓超は『三十自述』で来日一年後の様子を次のように述べている。

> 戊戌九月至日本。十月與横浜商界諸同志謀設《清議報》，自此居日本東京者一年，稍能読東文，思想為之一変。[34]

まもなく梁啓超はヨーロッパに向けて出発するのだが、戻ってきた1902年の時点には、日本語教科書、文法書、辞書が数多く出版され、日本語の学習環境がすっかり変わっていた。一応日本語を身につけた留学生たちは日本語の翻訳に情熱を燃やし、大量の雑誌、図書を中国の読者に提供した。翻訳者集団が形成されつつあったのである。しかしそれでも『和文漢読法』は版を重ねていたのである。

おわりに

梁啓超は日本に向かう軍艦の中ですでに日本の政治小説『佳人之奇遇』を読む傍ら翻訳を試みたという。

> 晩霞丘ハ慕士頓府東北一里外ニ在リ左ハ海灣ヲ控キ右ハ群丘ニ接シ形勢巍然實ニ咽喉ノ要地ナリ一千七百七十五年米國忠義ノ士夜竊ニ此要害ニ占據シ以テ英軍ノ進路ヲ遮ル明朝敵兵水陸合撃甚タ鋭シ米人善ク拒キ再ヒ英軍ヲ破ル敵三タヒ兵ヲ増ス而シテ丘上ノ軍外援兵ナク内硝藥竭キ大將窩連戰歿シ力支フル能ハス卒ニ敵ノ陥ル所トナル後人碑ヲ此處ニ建テ以テ忠死者ノ節ヲ表ス散士明治十四年暮春晩霞丘ニ遊ヒ古ヲ弔ヒ今ニ感シ世ヲ憂ヒ時ヲ悲ミ放翁カ憤世ノ慨アリ詩ヲ賦シテ懐ヲ述フ曰ク

という『佳人之奇遇』冒頭の漢文読み下し調の原文を漢語（古典中国語）に戻すことは梁啓超にとってさほど難しいことではなかろう[35]。しかし『佳人之奇遇』が読めたとしても普通の和漢混淆文で書かれた近代新知識を内容とする書籍を読める保証はない[36]。

梁啓超の日本語能力はいかがなものか。日本の書物から自由自在に必要な知識を得られる域に達した

34）『年譜長編』171頁。「戊戌九月、日本にやって来た。十月、横浜の商界（財界）の同志たちと『清議報』の創刊を計画した。この時以来、日本の東京に一年間住み、少し日本語が読めるようになったことで、思想が一変した。」日本語版291頁。

35）『佳人之奇遇』の翻訳について、「基本的には忠実である」とされるが、梁啓超は翻訳者というよりは作品の紹介者とするほうがより妥当であろう。なぜなら当時の彼の日本語の能力からすれば、梁啓超を実際の翻訳者というには不合理な点があるという指摘もある。山田敬三「漢訳『佳人之奇遇』の周辺――中国政治小説研究札記」趙景深主編『中国古典小説戯曲論集』収、上海古籍出版社1985年384～404頁。王宏志「専欲発表区区政見」、王宏志編『翻訳與創造』収、北京大学出版社2000年172～205頁。なお『佳人之奇遇』にしても『十五小豪傑』にしても協力者の羅普が実質的な訳者というべきであろう。

36）黄遵憲は『日本国志』の序文で「（維新以後的日本職制章程条教号令……）概用和文／即日本文以漢字及日本字聯綴而成者也／（//の中は割注）と指摘している。

のか。これは永遠の謎かも知れない。例えば梁任容が次のように指摘している:「任公民元は帰国して後、決して日本書籍の事を口にせず、仏教史研究にも日本の学者の著作を決して引用しなかった。その理由の一つに軽視していたこともあるが、おそらく読解できぬことの方が、より大きな理由であろう。私の考察では、任公の日本語の程度は、先輩であり良き友人で日本国志を編纂した黄遵憲（公度）と非常に大きな差があった」[37)]。梁啓超の貢献は、中国社会に日本知識を提供するというより日本語が文明の担い手であることを中国人に認識させたことにある、と筆者は考えている。

梁啓超は積極的に日本発の近代知を取り入れようとした。日本語習得の面で挫折したとはいえ、無意味に終わったわけではなかった。但しその不完全な日本語で日本の書物を読むとき誤解、誤読がなかったのか、梁啓超の東学背景を考える際、忘れてはいけない要素であると思う。

37) 石雲艶『梁啓超與日本』77頁より引用。但し黄遵憲の日本語能力にも疑問が残る。足かけ4年未満の日本滞在で黄遵憲が日本語をマスターした事実はないだろう。確かに『日本国志』を編纂するために黄遵憲は日本語の文献を数多く取り扱ったが、独自の力で例えば「刑法志」のような内容を翻訳できるほどの語学力はないと考えた方が自然である。沈国威「黄遵憲『日本国志』的編碼與解碼」、『東西学術研究所紀要』第40号2007年125～155頁参照。

東アジア文化交渉研究
第　2　号

発行日　2009年3月31日
編　集　関西大学 文化交渉学教育研究拠点ICIS
拠点リーダー　陶 徳 民
発　行　©関西大学 文化交渉学教育研究拠点ICIS
〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号
電話 06-6368-0256
URL http://www.icis.kansai-u.ac.jp/
印　刷　株式会社 遊文舎